

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520102

研究課題名（和文） 日本のジャズ研究序説—近代化と大衆文化—

研究課題名（英文） An Introduction to the Study of Jazz in Japan
： Modernization and Popular Culture

研究代表者

細川 周平（HOSOKAWA SHUHEI）

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：70183936

研究成果の概要：

日本のジャズ文化を「日本的」という民族性、「ジャズ喫茶」という空間、「ジャズ文学」という文学概念、「シンフォニック・ジャズ」というサブ・ジャンルなどから明らかにした。とりわけ戦前に焦点をあてて、モダン文化の中心的なメタファーとしてのジャズの重要性を強調し、文化的翻訳の概念を再検討した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,200,000	390,000	3,590,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：日本、近代化、大衆文化、ジャズ

1. 研究開始当初の背景

1990年代に入って、ジャズは評論家の巨人列伝や無批判的な讃美や評価ではなく、アメリカ史や音楽学の専門家の手によって新たな対象として注目されている（日本語文献はほとんどない）。

ジャズというジャンルがどのように構築されたか、文化的ヒエラルキーのなかをどのように上昇してきたのか、スタイルの変遷は従来の教科書や評論が述べてきたように天才の出現によって引き起こされたのか、娯楽産業はジャズをどう扱ってきたのか、人種や階級はジャズ演奏家や聴衆にどう影響して

きたのか、女性アーティストは男性中心のジャズ界でどのような位置にあったのか、電気楽器や録音や増幅テクノロジーはライブやスタジオの仕事をどう変えてきたのか、プロデューサーや興行主や批評家（多くはユダヤ人）はどのような立場からジャズ界を作り出したのか、下積み演奏家はどのような生活をし、どのような場所でどのような戦略を取って生き延びてきたのか、また「アメリカの国民音楽」という標語に見られるナショナリズムはどのような根拠があるのか。最近のジャズ研究は批判的音楽学や文化研究の成果を汲み入れて、従来の「偉人と傑作」パラダイ

ムから外れる方向に向かっている。

研究開始当初の英語圏のジャズ研究の状況については、研究成果で挙げた「ジャズ研究の最近の動向」でまとめた。そのうち本課題はアメリカ外のジャズの研究の流れに属する。ドイツ、ロシア、イタリア、イギリス、オーストラリア、キューバ、スウェーデン、中国などについての著作や論文がこれまでに出版されている (Taylor Atkins, ed. *Jazz Planet*; Bruce Johnson, *The Inaudible Music*; Andrew Jones, *Yellow Music*; Michael Kater, *Different Drummers*; Frederick Starr, *Red & Hot* ほか)。

日本については Taylor Atkins, *Blue Nippon* (2001) という決定的な著作がある。バンドメンバーの推移をエピソード的に記しただけの日本人評論家の通史と違い、この本は評論家、ジャズ喫茶、ジャズクラブ、聴衆、レコード会社、ダンスホールを含めた「ジャズ界」を包括し、演奏家と非演奏家の相互的關係、アメリカニズムとナショナリズムの相克、外来音楽による文化的アイデンティティの表現というような問題を解き明かした。

2. 研究の目的

本計画はこれまで述べた国際的に盛り上っているジャズ研究の一端を担っている。これは日本語ではほとんど出版成果のない分野で、本計画がその先駆を成すといっても過言ではない。近代日本の音楽研究はこれまで明治の軍隊・学校・教会のようなオフィシャルな制度を中心に進められてきたが、本研究は大正・昭和を含め、大衆音楽を扱っているのが特徴である。大衆音楽では流行歌、それも歌詞分析、歌手・作曲家の伝記が中心だったが、本研究は特定のジャンルを扱い、音楽家の去就よりもジャンル自体の境界線、聴衆、言説、概念、空間、産業などについて論じる。この方法論はジャズだからこそ可能というよりも、音楽研究に現在の人文科学全体に共通する問題意識を持たせる事につながる。将来的にはアメリカ文化研究者との共同研究への発展が望める。

本計画はアトキンスが簡単に扱っただけのダンスとの関係、文学史のなかのジャズ、流行歌に埋め込まれたジャズの要素に焦点をあてて、より深い考察を目指している。そしてモダン文化全体の中で、ジャズが果たしたメタファーとしての役割、また人種概念などを明らかにする目的で始められた。

日本のジャズ文化を大正末の萌芽形成期にさかのぼり、音楽、生活の近代化との関連、流行歌、レビュー、映画、ダンスのような大

衆文化との関連を探ることを目的とした。ジャズという用語は、時代や立場によって、ずいぶん違う意味を包含してきたため、音楽用語として定着する以前には、アメリカニズムや近代化のメタファーとされた。その多様性を明らかにすることを目的とした。

本計画では日本のジャズをアメリカのジャズの模倣というよりも、近代化の様相の異なる文脈に適応されたサウンド、価値、感受性の複合体と見なす。そこにはアメリカのものこそ本物と見る純粋主義と現地の文脈でしかるべき評価を得ようとする折衷主義、適応主義との衝突が常に見られる。

3. 研究の方法

ダンス雑誌、新聞、総合雑誌、音楽雑誌を読み通して、ジャズ関連の記事を抜き出した。主にCD、LPに復刻された音源より、音楽や声について分析した。

4. 研究成果

戦前のジャズ文化について文化史的な視点を確立できた。娯楽産業、文学などとの関連を明らかにできた。

たとえば戦前のジャズ喫茶について (詳しくは研究成果「ジャズ喫茶の文化史戦前篇—複製技術時代の音楽鑑賞空間」参照)。珍しい輸入レコードを主な特徴とする音楽喫茶は昭和初年、大学生が尖端文化のヒーローとなった時期に都市部に登場した。そのうちジャズを専門にかけける喫茶店 (ジャズ喫茶) は学生街、繁華街に多く生まれ、高級オーディオ、女給、インテリアとセットでアメリカ志向の学生を集めた。このような複製技術を介したスウィング受容は、日本の大きな特徴である。バンドはダンスホールが主な演奏場所で、なかなかスウィングのような音楽的に高度な演奏は受け入れられなかった (踊り手は即興演奏についていけなかった)。

スウィングはアメリカでは演奏家の肌の色、演奏スタイルの「人種性」が問われたが、日本でも黒人音楽好き、嫌いが登場し、「人種的偏見」にもとづく批評を書いた (詳しくは研究成果「スウィング・ニッポン」参照)。これは来日した黒人バンドの評価にも現れた。すぐれた黒人演奏家も、既存の原始主義的な人種イメージ (非理知的、本能的、感覚的など) を覆すにはいたらなかった。それは当時いう「グロテスク」の概念と適合した。

「東京ブギウギ」で知られる笠置シズ子は、戦前、ほぼ唯一、黒人的なノリ (グルーヴ) を身につけた日本人歌手で、作曲家服部良一

は、その特性を生かした旋律と編曲を行い、松竹楽劇団の舞台上で歌わせた。「私のトランペット」では日本で初めてのスキヤットを試みている。「ホット・チャイナ」では三連符を巧みに使い、アクセントを拍子から外す唱法でスウィングのスタイルを表現した（詳しくは研究成果「笠置シズコのスウィングする声」とその英訳“The swinging voice of Kasagi Shizuko”参照）。

アメリカンリズムが強烈なジャンルを「日本化」する試みは、ジャズ輸入のころから存在した。それを「日本的ジャズ」と仮に名づけて系譜を追った（詳しくは研究成果『『日本的ジャズ』をめぐって』参照）。昭和初年以來、既存の旋律を新しい語法に編曲することが始まった。昭和10年代には国粹主義が台頭したこともあり、この試みは盛んになった。

戦後は60年代後半、左翼運動とともに「日本的ジャズ」は再び提唱され、既存の旋律の編曲ではなく、和楽器との合奏、日本的な題名、ジャケット、旋法がよく用いられた。しかし一時的な流行に留まり、70年代後半からは日本の可否かは問題ではなくなった。あるときには極端に日本性を追求しても、それを維持発展する演奏家はいない。このようなシーンの動きを文化ナショナリズムとの関連で論じることがこれから要求されるだろう。

ジャズという言葉のあいまいさが存分に発揮されたのは、昭和4年より数年間にわたって春陽社より出版された大都会尖端ジャズ文学叢書だった。ジャズの演奏者を扱った巻は少ないが、モダン都市風俗を扱った各国の通俗小説が集められた（日本からは新興芸術派とプロレタリア文学が2巻にまとめられている）。このうちベン・ヘクトの『一〇〇一夜シカゴ狂想曲』は原文の読みやすい流れを無視し、倒置、記号、ルビで異様にせわしない文体を創造している。この調子はずれこと当時の文学にとっての「ジャズ」であった。

いわゆるシンフォニック・ジャズ、つまり交響楽団の演奏を前提とした「作曲された」ジャズ曲で、最も有名なガーシュインの『ラプソディ・イン・ブルー』の日本初演の状況を文書から再現した。当時はダンス雑誌が未刊行で、既存の洋楽雑誌でジャズは論じられた。そこではヨーロッパ音楽の現代的な派生型と考えられ、即興性、人種性は二次的な特質と見なされた。このようなジャズ観は1930年代後半のスウィング期に、「黒人好き」の白人評論家によって改められ、現在の黒人中

心主義が打ち立てられる。今日ではガーシュインやホワイトマンの「書かれたジャズ」を主流と見る考えは、奇妙ではあるが、この研究ではこの考え方の背後にある人種観、音楽観を明らかにし、それを直輸入した日本の受容について論証した。

『ラプソディ・イン・ブルー』を日本初演したのは、トーキー映画制作を行っていたスタジオの専属オーケストラ、コロナ・オーケストラで、その指揮者でアメリカ帰りの紙恭輔は「日本のグローフェ」と呼ばれ、シンフォニック・ジャズの普及に努めた。彼らはラジオでもたびたび演奏し、新しいメディアの間を行き来した。このようなメディアの地図のなかで、シンフォニック・ジャズはヨーロッパ音楽の聴取者層にも比較的容易に受け入れられた。即興に不慣れた演奏家にとっても、「書かれた」ジャズは練習曲として機能した。そこからやがて日米開戦直前の短いスウィング時代がやってきて、即興中心の演奏スタイルが生まれてくる。その意味で、シンフォニック・ジャズは過渡的なジャズ文化と考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7件）

- ① 細川周平 「スウィング・ニッポン」『新潮』4月号、2009年、280～281ページ、査読無。
- ② 細川周平 「『日本的ジャズ』をめぐって」『日本研究』35号、2007年、451～467ページ、査読有。
- ③ 細川周平 「ジャズ喫茶の文化史戦前篇—複製技術時代の音楽鑑賞空間」『日本研究』34号、2007年、209～248ページ。
- ④ Shuhei Hosokawa “The swinging voice of Kasagi Shizuko: Japanese jazz culture in the 1930s”, *Research on Art and Music in Japan, IRCJS*, 2007, pp. 159-185、査読無。
- ⑤ 細川周平 「スウィング・ニッポン—戦前日本の黒人音楽受容」、荒このみ・生井英考編著『文化の受容と変貌』ミネルヴァ書房、2007、129-148ページ、査読無。
- ⑥ 細川周平 「笠置シズコのスウィングする声」『表現における越境と混淆』日文研叢書36号、2005年、17～36ページ。査読有。
- ⑦ 細川周平 「ジャズ研究の最近の動向」『ポピュラー音楽とアカデミズム』（三井徹編・単行本）、2005年、107～137ページ。査読有。

〔学会発表〕（計 1 件）

「村のブラスバンド、近代音楽文化」日本音楽学会、2007. 5.27 （石巻市遊楽館）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細川 周平 (HOSOKAWA SHUHEI)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：70183936